〈書評論文〉

オルタ・ポリティクス

―― 批判的人類学とラディカルな想像力 ――

Ghassan Hage,
Alter-Politics:
Critical Anthropology and the Radical Imagination
(Melbourne University Publishing, 2015)

鈴　木　趙　生

1　主題と構成

本書は人類学者ガッサン・ハージによる、*White Nation* と *Against Paranoid Nationalism* に続く3冊目の単著である。上記2作はいずれも邦訳され、彼の研究は日本でも広く受容されつつある。しかし、オーストラリアのマルチカルチュラリズムに関する研究をはじめとする経験的分析が知られる一方で、彼の社会理論家としての側面は未だ包括的に検討されていない。だがハージは人類学者であると同時に社会理論家としても重要な貢献をなしており、P. ブルデューによる社会的世界の闘争理論と、さまざまな精神分析理論を主たる理論的基礎として、とくにネイションに関する独創的な理論を展開してきた。ネイションは博士課程在籍時からのハージの継続的な問題関心であり、前2冊の内容も、大枠としては彼のネイション理論に立脚しそれを拡張した分析といえる。対して、本書はハージのより新しい理論的論考が縦横無尽に展開された内容となっており、社会理論家としての彼の仕事を知るうえできわめて重要な一書である。

私見では、本書には2つの主題がある。1つは社会批判のあり方に関する理論的・方法論的検討であり、もう1つは、抑圧や支配を被る人々がいかにしてそれらに対する抵抗のみにとらわれることなく、人間らしい生を営むことが可能なのか、という問いに対する実

践的な論考である。これら2つの主題は互いに密接に連関しており、前者の理論的考察は、後者の実践的問題に答えようとするなかで生まれたものである。

ハージは批判的思想のあり方をアンチとオルタという2つの理念型に分ける。アンチとオルタのモメントはそれぞれ、「既存の抑圧、支配、搾取に対抗しようとする欲求と、なにかよりよいものを創造しようとする〔それと〕同等の欲求」（p. 84）を指す。そして「本書が対抗政治よりもオルタ・ポリティクスを特別扱いするとすれば、それは『オルタ』のモメントが『アンチ』より重要だからでは」（p. 1）なく、これまでの批判的思想の流れにおいてはオルタよりもアンチへの関心が強く、オルタな批判のあり方について十分に検討されてこなかったためである。そしてこのオルタな思考様式によって切り開かれる社会空間こそ、抑圧や支配からもそれらへの対抗からも自由な、人間らしい生の営まれる空間なのである。このような空間が必要なのは、抑圧され支配される人々は対抗しなければ不公正な現実を変えていくことができないが、同時に、対抗だけで生きていけるわけでもないからである。強固に対抗しようとすればそれだけ不正義への憤りや変革への強い意志が必要とされ、感情の大部分が投資されることとなり、日常を自由に生きる可能性は制限されてしまう。また支配と対抗のみでは、人々は敵／味方の論理で分断されてしまい、両者のよりよい関係性を築いていく可能性は失われる。本書で展開されるオルタな思考様式によって可能となるのは、アンチの対抗政治を損なうことなく、しかしなお生の自由さを担保し他者との関係性の改善につながりうる存在のあり方なのである。

本書は4部構成になっている。第1部はハージの時代認識を述べたもので、議論全体の背景を提供する。第2部は1つ目の主題について論じたもので、上述の2つの批判的思想のあり方が詳述されている。第3部は2つ目の主題に関する理論的論考であり、アンチの敵対感情とそれにとらわれないオルタな存在のあり方をいかに峻別するか、という問題を問う。第4部はこの問題についての経験的分析であり、事例に即してより具体的にオルタな存在のあり様が描き出される。本論でも基本的にこの構成に沿ってまとめていく(1)が、紙幅の制約から第3部は独立の項ではなく、第4部の説明のあとに付け加える形でごく簡単な要約を行う。これは、第3部の理論的考察は第4部で扱われるようなフィールド経験を抽象化する思索として生まれてきたものであるため、その豊かな実践的含意を伝えるには後者を優先すべきだと判断したからだ。以下では第2節で本書の内容を整理したうえで、第3節ではハージのこれまでの研究のなかに本書を位置づけ、その現代的意義を示す。

(1) 各部のタイトルは本書では付されていないため、評者が内容に照らしてつけている。

2　内容の概括

2-1　停止する拡張と根絶されうる他者（第１部）

はじめにハージは、現代西洋世界の政治文化状況を「後期入植者条件のグローバル化」と銘打っている。ここで「入植者条件（colonial settler condition）」という言葉で指しているのは、文明化の使命感でもって拡張を推し進めていくといった植民地主義下の社会形成のあり方のことで、さして特殊な意味はない。上の命名において重要なのは、むしろ「後期（late）」の意味合いである。ハージはレバノンのマロン派キリスト教徒、アパルトヘイト体制下南アフリカの白人、イスラエルのシオニストの３者がもつエートスを比較し、いずれも入植者条件だけでなく、自分たちの拡張主義的な力が止まったという感覚を共有していたという。この感覚こそ、後期の入植者条件を特徴づけるものなのだ。

この感覚の含意を説明するためにハージが度々引き合いに出すのが、F. ニーチェの「権力の感覚」という概念である。権力の感覚とは、たとえある者が客観的に有している権力の量が等しく変化しない場合でも感じられる、自身の権力が上昇しているのか下降しているのかの主観的感覚をいう。この概念の要点は、権力の量でなく感覚によって、権力をもつ者のふるまいが変化するという点である。つまり自身の権力が上昇していると感じる者は他者に対して寛容で慈悲深くふるまうが、反対に下降していると感じる者は、自分よりずっと弱い者に対してさえ不寛容で意地悪くふるまうという。

そしてこの権力の感覚の違いが、単なる入植者条件と後期のそれとを隔てる。権力の下降が感じられる後期の条件に生きる人々は、上昇が感じられる初期においてよりも防衛的な文化的エートスをもち、他者に対してより排他的で無慈悲にふるまう。力の弱化を感じ保身に専心した後期の条件下では、他者は自らを脅かす根絶すべき対象となり、自他はいかなる関係性も築かれえない敵／味方の論理で明瞭に分断されてしまう。かつて特定のフィールドでハージが分析し明らかにしてきたこの条件が、現在ではグローバル化やネオリベラリズム化により、とくにムスリムを「敵」として西洋世界全体に広がっているという。

2-2　批判的思想の危機ともう１つの系譜（第２部）

こうした状況に有効に応じうる批判のあり方を論じるのが第２部だが、そもそも社会批判は現在どのような状況にあるのだろうか。社会批判の歴史をふり返れば、長い間「危機」の観念がその中心的位置を占めてきた。「危機批判」の機能は、社会変革への糸口となる社会再生産機構の裂け目を明らかにし、変革的実践に取り組む政治主体を見出すことであった。だが次第に、危機が必ずしも社会変革につながらないこと、危機に直面した政治

主体は変革より保守へ向かう傾向にあることが明らかになり、危機批判の危機が生じてきた。

危機批判の危機は、現代社会が危機を克服すべき異常な状態ではなく恒常的な状態とみなすために、より深刻なものとなっている。この行き詰まりの例として、ハージは J.-P. サルトルと A. バディウの思想におけるオプティミズムを引き合いに出す。サルトルは有名な集列体と融合集団の概念によって、人々が互いに孤立し大衆化した状態からいかにして歴史を動かす集合的主体となりうるかを考察した。集列体の例として彼が挙げるのがバス待ちの列であり、バディウはこのバス待ちの集列体が融合集団になる過程を、バスがやって来ずに人々が不満を共有する状態へと移行する場面として描き出す。つまり「待つ」ことで形作られていた社会秩序が、バスが来ないという「危機」によって崩れ（「待てない！」）、変革につながるという危機批判の物語である。だがハージによると現代では、まさにこの「待つ」という状態が危機下でも維持されつづけるのだという。人々は危機のなかでも危機が過ぎ去るまで待ちつづけ、「待ち切ること（waiting out）」をヒロイズム化する受忍の美学を共有する。実際には危機は人種や階級等の違いによって不平等に受忍されているにも関わらず、皆が同様の危機を耐え忍んでいるかのように錯覚され、危機に抗して正当な声を上げる人々は逆に非難されてしまう[2]。こうした政治文化のもとでは、危機に変革の芽生えを期待するサルトル－バディウ流の批判は効力を失ってしまうのである。

では危機批判の危機というこの行き詰まりに直面したいま、批判的思想はいかにそれを乗り越えていけるのか。人類学的批判こそ、この現状打破のカギになりうるとハージは主張する。彼によれば、批判的思想は社会学的なものと人類学的なものという 2 つの系譜に分けられる。前者は危機批判のように既存秩序に対抗するアンチな思考と親近性をもつ系譜、後者は既存秩序の外部へと逃れ出る生のあり方を模索するオルタな思考と結びつく系譜であり、各々を代表する人物としてブルデューと B. ラトゥールが挙げられる[3]。ブルデューは象徴的暴力によって支配関係がドクサ化されるメカニズム、つまり当たり前にみえるものが権力界における闘争から生じる過程を説明することで、既存秩序の脱自然化・脱運命化による自由の獲得を目指した。このように、当然視されている既存の現実を闘争の産物、構築の結果と捉えることでその変革可能性を導くのが、社会学的批判である。

対してラトゥールによる存在の多数性に関する議論は、こうした社会学的批判への問題

---

[2] たとえば 2005 年にパリ郊外で動乱を起こした若者が、「変革の主体」ではなく「社会のくず」とされてしまったように（p. 44）。

[3] 例示される 2 人がいずれも社会学者かつ人類学者であることからも分かるように、ここでいう 2 つの系譜は学問分野と一対一対応するものではなく、あくまで「主に～学において発展してきた批判性の様式」という歴史的種差性を意味する（p. 56）。

提起を含んでいる。それは、社会学的批判がしばしば既存の社会関係の脱神話化を目指すあまり、結果的にそうした諸関係とそれへの抵抗とに存在論的な優位性を与えてしまうという問題である。たとえば2人の人間の間に支配関係があった場合、社会学的批判あるいはアンチの観点のみからでは、支配／被支配の部分のみが拡大され問題化される。実際には人間関係は支配や搾取の論理のみでは捉えられない多元的なものであるにも関わらず、その多元性が捨象されてしまうのである。このように多数的な存在のあり方を単一のそれへと押し込めてしまいかねない社会学的批判に対し、人類学的批判は権力や抵抗、統治性、近代の外部に広がる空間を発見することで、既存の世界とはラディカルに異なる別様の現実へとわたしたちを誘ってくれるのだ(4)。

2-3　アンチとオルタのゆらぎのなかで（第4部・第3部）

では具体的に、オルタな思考によって切り開かれる別様の存在様式とはどのようなものなのか。この問いに答えるのが第4部である。本論ではこのうち、オルタな存在様式の可能性がとくによく例証されている第8章の議論を取り上げる。

この章ではイスラエルによる植民地主義と、その暴力に日々さらされながら生きつづけるパレスチナの人々が主題として、かれらの生きる術として抵抗（resistance）と弾力（resilience）という2つの概念が対比される。抵抗がパレスチナの人々に与える意味を明確化するために、ハージはイルーシオ（*illusio*）というブルデューの概念を応用する。

> 社会はブルデューにとって、そこに属する人々にさまざまな道あるいは探究、なんらかの存在理由を提供するのであり、それらに投資する人々は自らの生を意味あるものにすることができる。イルーシオは人間がそうした有意味性の空間を占領する（occupy）ことで、自らの生を生きる価値のあるものにするこの過程を示す。かれらはそのような空間が提供するはずのものに夢中に（preoccupied）なることで、そうするのである。（p. 166）

むろんブルデューがいう「占領」とイスラエルによる占領とは意味が異なるが、ハージはあえて両者を重ね合わせて論じている。イスラエルの占領に対する抵抗はパレスチナの人々にとって一種の「占領」であり、かれらの生きる意味の基盤を形作っている。しかし

(4) ここではラトゥールに代表されているが、人類学的批判はいわゆる未開人類学の伝統から育まれてきたのだとハージは主張する。実際に本書ではM. モースやL. レヴィ＝ブリュルの研究が、その典型として扱われている。

まさしくここに、抵抗を「占領されざる（unoccupied）」生き方とはいえない理由がある。というのも、占領に抗うことに生の意味を見出す時点で、人は占領という暴力的現実にとらわれているからだ。つまり抵抗のイルーシオのなかで生きる限り、人は占領の現実にもそれへの抵抗にもとらわれないような、普通の人間的な暮らしを送ることができなくなってしまうのである。

こうした存在様式と対比されるのが弾力の存在様式である。ハージは resilience に類似するアラビア語 murunah の定義、「変容されることなしに、変容させる力を吸収できる物質の能力」（p. 167）によって弾力の性質を説明する。パレスチナの事例においてはイスラエルの占領が人々の生を変容させる力として働いており、抵抗は既にそれによって変容させられてしまった生き方である。対して弾力的な生き方とは、占領のなかだからこそ普通に生きること、占領に生き方までも「占領」されないことを意味する。

しかし暴力的支配の過酷な現実に日々さらされるなかで、いかにして「占領されざる」生き方が可能なのか。ハージが取り上げている事例をみてみよう。あるとき同僚に案内されてヨルダン川西岸地区を訪れたハージは、そこで目にしたあからさまな植民地主義の暴力的光景に衝撃を受けたという。そしてパレスチナに数年住んでいる同僚がイスラエルのあらゆる憤慨すべき行いを熱弁するのをみて、この場所にずっと住み続けている人々はさも強い感情を露わにするに違いないと考えた。しかし実際に観察していると、かれらは予想よりはるかに感情的でも関心を抱いている風でもなかったのである。ハージがこのことについてある住人に尋ねてみたところ、彼はこう答える。

> わたしたちには養い世話をするべき家族がいるのです。壁のことばかり考えて過ごしてはいられません。わたしたちは忘れるよう努めなければならない。（一瞬止まって）忘れなければならないが、決して忘れてはならないのです。（再び止まり、素早く付け加えて）いずれにせよ、かれら［イスラエル人たち］は決して忘れさせてはくれません。（p. 169）

ハージは「忘れる」という彼の言葉を、ブルデューの戦略概念と S. フロイトの排除概念を組み合わせ、「戦略的排除（strategic foreclosure）」として分析する。フロイトによればトラウマ的出来事を意識して忘れようとすることは多大な感情的消耗をともなうため、精神はただ忘れようとするだけでなく、忘れていることを忘れようとする。排除とはこの二重の忘却を指し、弾力的実践はある意味で排除と捉えられるとハージはいう。弾力的実践とは占領を忘れようとする意識的抵抗を超えた更なる忘却、つまり占領を意識せず

に生きること、占領に「占領」された意識から逃れた人間らしい生を可能にする実践なのである。

だがここでフロイトのいう排除は永続的な精神状態だが、被植民地支配者は占領の現実を「決して忘れさせては」もらえないうえ、この意味での排除は抵抗の可能性すら排除し植民者のひとり勝ちを招いてしまう。ここで、ブルデューによる戦略概念の有効性が発揮される。彼のいう戦略とは忘却と相容れない意識的で合理的なものではなく、ハビトゥスが生みだす前意識的な次元における、状況への可変的な応答なのだ。戦略的排除とは抵抗を不可能にしてしまう一回的な転換ではなく、日々さらされる暴力的現実にときに抵抗しながらも占領と抵抗とに完全に「占領」されない日常を送るための、可変的なハビトゥスなのである。このように抵抗的実践と弾力的実践とを行き来することで、アンチとオルタの2つの生き方の均衡を保つことが、占領下で暮らす人々の生きる術なのだ。

この分析からもわかるようにハージのオルタ論はアンチの対抗政治を否定するものではなく、対抗に没入し擦り切れてしまいかねない生を問題化し、アンチとオルタのゆらぎのなかで生の自由を確保しようとする思想なのである。このゆらぎの状態は、人が生きていくなかで抑圧や暴力によって刻み込まれた敵対感情と自分を切り離すことで、はじめて可能なものとなる。観念や象徴の次元で二項対立を止揚するといった認識論的なオルタナティヴを見出すだけでは、人が自らの存在と分かちがたく結びついた強い敵対感情にとらわれず生きる、現実的な可能性は生まれない。それゆえ第3部はまさに、ゆらぎの存在状態が可能となるために必要な感情の切り離しの問題を扱っている。そこでは、イスラエルなど批判対象への人間的な憤りと研究者としての客観的態度との間を行き来するハージ自身、そして白人社会を志向し拒絶され、みずからの黒人性と白人社会への複雑な感情と向き合いつづけたF. ファノンの生と思想を事例として、アンチの感情とオルタな存在様式との関係が豊かに描き出されている。こうしたハージの思索において一貫しているのは、あれかこれか（either/or）の二分法的思考から逃れようとする視点である。アンチ／オルタの「どちらか」ではなく「どちらでも」生きられる自由の確保こそ、人々がますます敵／味方に二分されていく世界の排他性に抗しうる道なのである。

3　位置づけと意義

最後に本節では、本書の内容をハージの研究史上に位置づけ、その現代的意義を示す。

ネイションが想像された共同体だということはB. アンダーソン以来の学術的な定式となっているが、想像された共同性があるからといって、それがなぜナショナリズムのよう

な強い執着と感情を呼び起こすのかが直ちに説明されるわけではない。虚構であるはずのネイションの共同性が、なぜ強力な現実性をもって人々に生きられ感じ取られるのか。ハージは博士論文以降こうした主題に取り組み続け、ネイションという虚構的世界が確固たる現実として経験され、その世界への情緒的没入から他者への暴力が生起するメカニズムを理論的に説明しようとしてきた。ハージによれば、ネイションの成員は各々のネイションに特有の言葉遣いや立ち居ふるまい、文化的嗜好といった文化資本の量や質によって階層化されるとともに、かれらが生きる想像的世界それ自体が多元化されている。つまりネイションという単一の世界があってそれが多様な仕方で認識される、というだけでなく、まさにネイションという想像上の世界それ自体が、各々の成員にとって異なる現実性をもって立ち現れているのである（Hage 1996）。

では、そのように国民国家という同じ空間の内部にいながらも分断された現実を生きる人々が、いかにしてそれらの異なる世界同士を架橋する関係性を築くことができるのか。ネイションの根源的多元性の理論を展開したハージが自然に行きあたるのが、この関係性の問題であり、その 1 つの可能性が、20 世紀後半に登場し一世を風靡したマルチカルチュラリズムであった。実際彼はマルチカルチュラリズムに大きな可能性をみたのだが、それが異質な人々を架橋する包括的世界を生み出す方向に作用していないことを感じ取り、既存のマルチカルチュラリズムを批判することでその再構成を提案した（Hage 1998=2003）。しかしその後 21 世紀に入ると、9.11 を大きな原動力とする「テロとの戦い」の政治文化のなかで排他的ナショナリズムが再燃し、「均質なネイション」という幻想の実現への欲求が暴力的に表出されていく。この強力な排他的ナショナリズムや人種主義の反動に対して、周縁化され抑圧される人々もまた強力な対抗論理でもって応答するなかで、異質な人々は関係性を改善するどころかますます敵／味方の二分法で切り分けられていってしまう。

こうして新たに生起してきた状況をまずは正確に記述・分析し、そのうえでこの二分法的世界を超えていく術を見出すことこそハージの新しい仕事であり、その成果を理論的な形で提示したのが本書なのである。政治権力による暴力が吹き荒れる現代世界において、暴力を被る側がよりよい生を願うならば、かれらは不公正な現実に抗わざるをえない。しかしその対抗が他者を激しく敵視するようになれば、それだけ他者もまたかれらを強く「敵」として悪魔化し、両者が完全に分断されていってしまう危険が生じる。敵／味方に二分される支配的現実を再生産してしまうことなく、正当な対抗を行いながらも、なお他者とのよりよい関係性を築いていける術とはどのようなものか。こうした問いへのハージなりの応答が本書の議論、つまり人類学的批判とオルタ的視点の再発見・再構成、そしてアンチとオルタを行き来しながら生きる存在状態の肯定と模索なのである。

このように本書は、ハージがこれまでの研究路線に則りながら踏み出した新しい一歩であり、彼の社会理論のエッセンスを知るうえで重要というだけでなく、現代世界の行き詰まりを切り開く活路を見出そうとする画期的な思想実践の書だといえる。

参考文献

Hage, Ghassan, 1996, "The Spatial Imaginary of National Practices: Dwelling—Domesticating/Being—Exterminating," *Environment and Planning D: Society and Space*, 14 (4): 463–85.

————, 1998, *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*, Annandale: Pluto Press.（= 2003, 塩原良和訳『ホワイト・ネイション――ネオ・ナショナリズム批判』平凡社.）

（すずき　たけお・修士課程）